

「風姿花伝」の心理学的研究

—第一年来稽古条々に関する職業的発達について—

熊 倉 弘

A Psychological Study of "Fushi-Kaden"

—On the "Nenrai-Keiko Jojo"—

HIROSHI KUMAKURA

1

1) 「風姿花伝」は、能楽の大成者世阿弥元清(1363~1443頃)が一子相伝の秘書として、「能楽のため、家のため」に、父親阿弥の遺訓に基づいて述作したもので、現存する能楽論の最古のものである。

「風姿花伝」は略称して「花伝」、通称「花伝書」といわれ、応永7年4月(1400年)から応永9年3月(1402年)ごろまでに書かれたもので、世阿弥の38歳から40歳ごろのものといわれている。その内容は、第1年来稽古条々、第2物学条々、第3問答条々、第4神儀云、第5奥儀讃歎云、第6花修云、第7別紙口伝の七篇にわかれている。そして世阿弥の能楽論は西尾実博士によれば、「観阿弥の先駆的偉大さと、創造的エネルギーの卓抜さに対する感激が根柢となり、世阿弥自身の体験のゆたかさ自覚の深さが十分に生かされた、比類のない高い芸術論になっている。」¹⁾といわれている。又「風姿花伝」七篇は、「世阿弥の順調期、しかも、彼のいう“盛りの極め”において書かれた伝書であり、そこに書きのこされているところは、彼の父であり、師である観阿弥の人間と芸とに対する無限の感歎と尊信が原動力となって展開されたものであり、観阿弥から伝えられたものを身をもって子孫に伝えようとする情熱によって貫かれている。」²⁾ともいわれている。

2) 世阿弥の生涯を職業階梯(Vocational Ladder)の点からみると、だいたい次のように表わすことができる。

第1期 12才~46才(応安7年~応永15年)…35年間足利義満に知られた年から、義満の死にいたるまで、観世太夫として稽古に専念し、演出・演技に精進した年代

12才 (応安7年)最初の舞台

22才 (至徳元年)父を失う

32才 (応永元年)奈良一条院で、義満の前に猿楽興行

37才 (" 6年)一条竹鼻で3日間の勸進猿楽

40才頃 (" 9年)義満の命名によって世阿弥陀仏を称する

46才 (" 15年)義満死去

「風姿花伝」の
著述

第2期 46才~66才(応永15年~応永35年)…20年間

足利義持の將軍時代

1) 西尾実：能楽論集 日本古典文学大系歌論集能楽論集・岩波書店 p. 313。

2) 同上

p. 314。

世阿弥は円熟期から老成期に入って、いよいよ芸境を深め、一方長子元雅が成人して、観世座の実力は前期以上に充実し発展していたと思われる。観世座は義持によっては義満生存中のような待遇を受けることはできなかった。

60才（応永29年）以前に出家入道し、それと前後して観世大夫の地位を長子元雅に譲った。

世阿弥の著作の最盛期で、後進者の育成と薫陶に全力をあげた。

「花鏡」の著作

第3期 66才～81才（正長元年～嘉吉3年）…16年間

足利義教の時代

71才（永享2年） 元能出家引退

73才（" 4年） 後継者元雅伊勢の津で客死

75才（" 6年1434）義教によって佐渡へ配流せられる

永享8年にはまだ在島している

その後の動静不明

「拾玉得花」の著作

81才（嘉吉3年1443）死去と伝えられている

3) 本研究は、「風姿花伝」を心理学的立場から考察を試みたもので、特に本報告は、「第1年来稽古条々」について職業発達論的に考察したものである。

2

1) 西尾実博士によれば——「年来稽古条々」においては、生涯を「7歳」から「50有余年」までの7時期に分け、各時期の特質と稽古の方法や覚悟を体験的に説き、注意事項ともいうべきものを特記している。いずれにおいても各年令年令における人間性のとらえ方が的確で、稽古の方法や覚悟は、人間のあるべき生き方に徹している。世阿弥が、これを書いたのが38歳の時であったとすると「44～5」「50有余」の老年期の条は、観阿弥の晩年におけることばや生活を書いたものとすべきであろう。そう考えてみると、「34—5」までの5つの時期の書き方には、観阿弥のことばと生き方を、世阿弥自身の体験を通して書いている自信のたしかさがあり、「44—5」「50有余」の老年期の条の書き方は、観阿弥のことばと生活によりかかっている観がある。³⁾——とされている。

すなわち、「年来稽古条々」は年令段階に応じた説き方をしている。これを発達心理的にみれば、幼年期・少年期・青年期・壮年期・老年期を通じて、その年代における発達心理の原理に則して学習方法が述べられていると見ることができよう。

1. 7才

2. 12. 3才より

3. 17. 8より——第1の転期…少年期が青年期への転期…（第1の危機転期）

4. 24. 5より

5. 34. 5より——第2の転期…壮年期から老年期への転期…（第2の危機的転期）

6. 44. 5より

7. 50有余

幼・少年期

青年期

壮年期

老年期

2) 幼児・児童・青年・成人および老人という人生の基礎段階は、いうまでもなく、いつからかわからないほど遠い昔から知られ広く用いられてきたことばである。心理的生活段階につ

3) 西尾実：能楽論集 p. 314～315。

いての重要な研究はビューラー (C. Buehler, 1933) によってなされた。ビューラーが生活史の分析の結果によって定義した心理的生活段階は、5つであった。すなわち――

1. 成長段階 (Growth Stage) …受胎からほぼ14才ころまで
2. 探索段階 (Exploratory Stage) …15才から25才ころまで
3. 確立段階 (Establishment Stage) …25才から45才まで
4. 維持段階 (Maintenance Stage) …46才から65才まで
5. 下降段階 (Decline Stage) …65才ごろ以後

(註) ここにあげた年令の限界は、ビューラーにしたがったものであるが、これはおおよそのことであって、ひとによって、かなりのちがいがあはることは当然である。

探索・確立・維持・下降という過程は、単に職業面だけでなく、人生や人の生き方のすべての面を含んでいる。それにまたビューラーが示したように、男子の生涯にも、女子の生涯にも作用しているのである。

又、ミラーとフォーム (Miller, D. C. and Form, W. H. 1951) 両氏による生活段階の社会的分類は、仕事中心であった。もちろん彼らは仕事上の安定についても関心を持っていたが、彼らの区分によると、

1. 就業準備期 (Preparatory Work Period) …14才ころまで
2. 初頭就業期 (Initial Work Period) …14才～16才
3. 試行就業期 (Trial Work Period) …16才～35才
4. 安定就業期 (Stable Work Period) …35才～60才
5. 引退期 (Retirement Period) …60才ないしは65才にはじまる

尚又、ギンズバーグ (E. Ginzberg, 1951) は、職業選択に関する立場から、次の6つの段階分けを試みている。

1. 空想的選択の時代 (Fantasy Ages) …11才以前
2. 試験的選択の時代 (Tentative Ages) …11～17才
3. 現実的選択の時代 (Realistic Ages) …17～24才
4. 確立時代 (Establishment Ages) …25才～44才
5. 維持の時代 (Maintenance Ages) …45才～64才
6. 衰退の時代 (Decline Ages) …65才以後

以上を比較対象するために表にすると、次のようになる。

	Eli Ginzberg et al : Occupational choice, 1951	C. Buehler : Life Stage, 1933	Miller & Form : Vocational Stage, 1951	風姿花伝 : 年来稽古条々
幼・少年期	空想時代 (11才以前)	成長の時代 (～14才)	就業準備期 (～14才)	1. 7才 2. 12, 3より
青年期	試験的選択の時代 (11～16才)	探索の時代 (15～24才)	初頭就業期 (14～16才)	3. 17, 8より
壮年期	現実的選択の時代 (17～24才)	確立の時代 (25～44才)	試行就業期 (16～35才)	4. 24, 5より 5. 34, 5より
	確立時代 (25～44才)	維持の時代 (45～64才)	安定就業期 (35～60才)	6. 44, 5より 7. 50有余
老年期	維持の時代 (45～64才)	衰退の時代 (65～)	引退期 (60～65才)	

3

1) 7 歳

この芸において、大方、七才をもて初めとす。この比の能の稽古、必ず、その者自然とし出だす事に、得たる風体あるべし。舞・働きの間、音曲、もしくは怒れる事などにててもあれ、ふとし出ださんかかりを、うちまかせて、心のままにせさすべし。さのみ、よき、あしきとは教ふべからず。餘りにいたく諫むれば、童は氣を失ひて、能ものぐさくなり立ちぬれば、やがて能は止まるなり。

ただ、音曲・働きの舞などならでは、せさすべからず。さのみの物まねはたとひすべくとも、教ふまじきなり。大場などの脇の申樂には立つべからず。三番・四番の、時分のよからんずるに、得たらん風体をせさすべし。

(岩波文庫版・世阿弥作、野上豊一郎・西尾実校訂 風姿花伝による)

能の修業の始期は7歳がよいといっている。そして、本人が自然に独創で演じ出すわざがもっとも堂に入ったやり方である。容姿とか動作の美を見せるのが主眼であって、心のままにさせることがたいせつである。よいわるいという批判はしないことである。よいわるいという枝葉末節にとらわれると、本人はいや気がさしてくるし、そうなると能の進歩はとまってしまうものである。又広い場所で演ぜられるような晴れの場所に出すことも好ましいことでない。…というわけで、幼年期の教育の要に依り触れている。心理学的にいえば幼少年の心理の発達に即した修業方法を見事に言い当てている。すなわち、自分の接触している人をモデルとして、考えたり夢みている時代である。彼自身がおとなになったとき、社会における役割は、やはり職業(能)を通じてしなければならないことを漠然と感じ、子どもは子どもなりに、自分のそういう姿を想像してみるである。

このような職業的方向づけ(Vocational Orientation)は、パーソナリティの発達の上において、中心的な役割をなすものであるから、それはよきにつけ悪しきにつけ、子どもにとってひじょうにたいせつな面であるといえよう。

2) 十二、三より

この年の比よりは、早や、やうやう、声も調子にかかり、能も心づく比なれば、次第々々に、物数をも教ふべし。先ず、童形なれば、何としたるも幽玄なり。声も立つ比なり。二つの便りあればわかるき事は隠れ、よき事はいよいよ花めけり。

大方、児の申樂に、さのみに細かなる物まねなどは、せさすべからず。当座も似合はず、能も上らぬ相なり。ただし、堪能になりぬれば、何としたるもよかるべし。児と云ひ、声と云い、しかも上手ならば、何かはわかるべき。

さりながら、この花は、誠の花には非ず。ただ、時分の花なり。されば、この時分の稽古、すべてやすきなり。さるほどに、一期の能の定めにはなるまじきなり。この比の稽古、やすき所を花に当てて、態を大事にすべし。働きのも確やかに、音曲をも、文字にさはさはと当り、舞をも、手を定めて、大事にして稽古すべし。

(岩波文庫・版世阿弥作、野上豊一郎・西尾実校訂 風姿花伝による)

この年齢になると、声も調子に合うようになり、能についての理解も出来てくる頃だから、種々の技術やいろいろの曲目を教えること。子ども姿とよく立つ声という二つの便宜があるから、わるい点ははっきりあらわれないで、よい点がますますよくあらわれる年代である。しかし、あまりに手のこんだものは、その場の見た目にも不似合であるし、上達もしないから年齢

の若さによる好条件によって、一時は観客をひきつけるが、条件が変わるとともにその効果も失われるものである。したがって、年令の若さによる好条件で能役者としての生涯を評価する基準にはならないから、のびのびとしこなせる所を目標にして、はげみをつけさせると同時に、技術面をば厳格にしつけて、一語一語はっきりとわかるように発音するようにさせたり、舞の型の基本をしっかりと身につけさせるように仕向けなければならないことを、強調している。

3) 十七、八より

この比は、また、餘りの大事にて、稽古多からず。先ず、声変りぬれば、第一の花失せたり。体も腰高こしだかになれば、かかり失せて、過ぎし比の、声も盛りに、花やかに、やすかりし時分の移りに、手立てだてはたと変りぬれば、氣を失ふ。結句、見物衆もをかしげなる氣色見えぬれば、恥かしさと申しかれこれ、ここにて退屈するなり。

この比の稽古には、ただ、指をさして人に笑はるるとも、それをば顧みず、内にては、声の届かとどん調子にて、宵・暁のよひ あかつき声を使ひ、心中には、願力を起して、一期の堺こことなりと、生涯にかけて能を捨てぬより外ほかは、稽古あるべからず。ここにて捨つれば、そのまま能は止まるべし。

惣じて、調子は声によるといへども、黄鐘・盤渉わうしき ばんしきをもて用ふべし。調子にさのみかかれれば、身なりに癖出くせいで来るものなり。また、声も、年寄りて損ずる相なり。

(岩波文庫版・風姿花伝による)

この年代は少年期から青年期への転期にあたり、第1の危機的転期になっている。

17.8歳の頃は、非常に難しい時期で、けいこも多くはできない頃である。第1に変声期になり声が悪くなる。からだつきも腰高になり、前のやすやすとやれた時分にくらべると見劣りがしてくる。そして本人の志気は沮喪する結果になる。その上に、見物する人たちもおかしそうにしている気配も見えるから、気まりわるさを感じて、あれやこれやでだめになってしまうことが起こる。

したがって、この頃の稽古の方法は、人に笑われるようなことがあっても気にしないで行うこと。自宅での稽古は声の出せる範囲の無理のない調子で、その時々によさわしい無理のない声を使って稽古することが肝要である。又一方では、祈誓を立てて、願意を貫こうとする意志をおこし、一生の浮沈の別れ目であることを認識して、生涯の運命をかけて稽古しなければならないという自覚を持ってこの道に精進することがたいせつである。そうでなければ、能役者として大成できない。声の高さの程度も、人びとの持前の声で定まっているというものの、調子にあまりこだわると、からだつきにある種の癖がついたり、声も年に似合わない年寄りくさくなって悪くなることがあるから注意しなければならない。という意味であろう。なかなか細心の注意が与えられていることがわかる。

つまり、この時期は発達段階からいえば探索期に相当する。青年の探索は現実吟味の過程である。青年が自分の能力・知識・技能などの点から、自分がどんな人間であり、どんなことができるかという青年自身の自我概念 (Self Concept) がはっきりしていることを示さなければならない時である。彼は青年の社会からはなれて、おとなの社会へうつる。すなわち社会学者のいう一つの副次文化 (Subculture) から他の副次文化への移行が行われる時期である。

探索過程はまた自我概念の完成への努力の過程である。それは働く世界における自分の位置の発見の過程である。試行とかもがきの問題は、一部は社会的適応の問題であり、成人の社会機構にはまりこむ問題とも考えられるし、仕事上の所要条件への適応の問題である。この意味

において、この段階は人生における第一の危機的転期といわれるのである。

したがって、この時期におけるすべての経験は児童期と青年期を通じて、自我概念の発達に寄与しているが、その経験をもってしても自己理解は容易でない。たとえうまくいっても限界があるのが普通である。青年から成人にうつるにつれておこる役割変化には、時間をかける必要がある。

青年は、身体的に成熟し、おとなよりも立派に見えるようになり、おとなと同じほど強くなってくる。青年は年令的に成熟し、又社会的に情緒的に成熟する。青年はおとなの副次文化の受容を通じて成熟する過程を踏むものである。そして自己理解と自我受容を大いに伸長し、自我概念を現実に適応し、自分のための場所を見出すようになる。これが探索過程における青年の心理的特性である。

4) 二十四、五

この比、一期の芸能の定まる初めなり。さるほどに、稽古の堺なり。声も既に直り、体も定まる時分なり。されば、この道に二つの果報あり。声と身なりなり。これ二つは、この時分に定まるなり。年盛りに向う芸能の生ずる所なり。さるほどに、外目にも、すは上手出で来たりとて、人も目に立つるなり。本、名人などなれども、当座の花に珍らしくして、立合勝負にも一旦勝つ時は、人も思ひ上げ、主も上手と思ひ初むるなり。これ、返す返す、主のため仇なり。これも誠の花にはあらず。年の盛りと、見る人の、一旦の心の珍しき花なり。真の目利きは見分くべし。

この比の花こそ初心と申す比なるを、極めたるやうに主の思ひて、早や、申樂にそばみたる輪説をし、至りたる風体をする事、あさましき事なり。たとひ、人も讚め、名人などに勝つとも、これは、一旦珍しき花なりと思ひ覺りて、いよいよ、物まねをも直にし定め、なを、得たらん人に事をこま細かに問ひて、稽古をいや増しにすべし。されば、時分の花を誠の花と知る心が、真実の花になは遠ざかる心なり。ただ、人ごとに、この時分の花に迷ひて、やがて、花の失するを知らず。初心と申すはこの比の事なり。

一、公案して思ふべし。我が位のほどをよくよく心得ぬれば、それほどの花は一期失せず。位より上の上手と思へば、本ありつる位の花も失するなり。よくよく心得べし。

(岩波文庫版・世阿弥作、野上豊一郎・西尾実校訂 風姿花伝による)

この時期は、一生の芸の成否のきまる最初である。声もなお、体格もおとならしく定まる頃である。したがって、能の道の二つの利点、すなわち声と身なりが壮年にふさわしい芸能が身につく時期である。競演の場に出て争って、勝つようなことがあると、自己を實力以上に高い価値評価をしたり、自分はすぐれた者であると思ひこむようなこともあるが、これは鑑識眼の高い人からみれば、まことかうそかがすぐわかることであるから、よくよく注意して戒めなければならない。

又この時期は、稽古を始めたばかりの未熟の段階なのであるから、芸道を極めた達人だという思い上がりをして、正道をはずれた故実のない勝手な意見を述べたりすることのないように心しなければならぬ。人にほめられたり、名人に勝ったとしても、それは一時的な珍らしさによる魅力のせいと深く反省して、型通りに正しくすなおに習練を積んでいくべきである。

虚名を真実と思ふ心が強ければ強いほど、真実から遠ざかる結果になるのであるから、虚名の花に迷わされてはならない。初心ということは、この時期のことである。

よく工夫をこらし、思案して、自分の芸道上の實力のほどをよく心得ていけば、その人の芸

位相当の魅力は一生なくならないものである。ということを常に心得ておくべきである。

以上を要約すれば、確立の段階において心すべき要諦を説いたものである。試行のあとに安定があり、探索のあとに確立がくる。24.5 才からはじまる確立の段階は、一言でいえば、自我概念 (Self-Concept) の修正と完成の段階である。

働く世界において自分の“ところ”を見出す過程は、おとなの副次文化を受けいれ、働く世界において可能的な“ところ”を独力で見透す過程である。認識の過程に相当する。又この段階においては、目標に向っての行動が特徴的であることも見逃せない。自我の確立によって安定化がもたらされるが、それには実にさまざまな要因が、安定化の過程に貢献したり、それを妨げたりするものである。人生の諸段階においては、もっとも重大な意味を持っているのが確立の段階であるといえよう。

5) 三十四、五

この比の能、盛りの極めなり。ここにて、この条々を、極め覚りて、堪能になれば、定めて、天下に許され、名望を得つべし。もし、この時分に、天下の許されも不足に、名望も思ふほどもなくば、いかなる上手なりとも、未だ、誠の花を極めぬ為手と知るべし。もし極めずば、四十より能は下るべし。それ、後の証拠なるべし。さるほどに、上るは三十四、五までの比、下るは四十以来なり。返す返す、この比、天下の許されを得ずば、能を極めたりたりと思ふべからず。

ここにて、なお慎むべし。この比は過ぎし方をも覚え、また、行く先ぎの手立をも覚る時分なり。この比極めずば、この後、天下の許されを得ん事、返す返す難かるべし。

(岩波文庫版・世阿弥作、野上豊一郎・西尾実校訂 風姿花伝による)

この時期は人間の一生の中で、盛りの絶頂である。この時期において風姿花伝の条々をよく理解して、この芸道に熟達すれば、世間に名人として認められ名望を得ることができる。

もし、この時期になっても、世間に名人として認められることもできず、名望も十分得られなかったならば、この芸道の達人の域に達することができないものと考えらるべきである。そしてこの時期に名人として認められないでしまうと、四十歳以後はだんだんと下り坂になるだけであるということを知らなければならない。四十歳から能が下手になるという事実こそ、真に名人の域に達していなかったということの証拠の現われなのである。

したがって、この 34.5 歳の頃において、いっそう自粛自戒して修業を積まなければならない。この時期は、過去に辿って来たいろいろのことをはっきりと理解し、将来のやり方をも自覚するという時期なのである。というように、自己の芸に対する客観的な評価をひじょうに重要視していることがうかがえる。

すなわち、この時期は職業的発達の段階からすると、やはり確立の段階に相当するといえよう。前節で述べたことがそのままここにもあてはまることになる。確立の段階は更によく吟味すると、自己安定の過程、努力の過程、不満足過程などの過程を通して確立の段階を通過するようである。

ある職業における安定化は、満足なタイプの仕事における、自我の確立——それは、まず試行、次に方向づけと動機づけによって、自分の目標がますますはっきりすることである。——によって、一部は、もたらされるが、また、ひとたび獲得できたものに忍従したり単に受容することにも帰因する。仕事上の適応は、それが積極的で健全なタイプのものであれば、そこで能力と興味がはげ口を見出し、そこで満足な役割が演じられ、そこで自我概念が完成されるが、

それはまた、あまり健全でないこともあり得る。それは、無感動、合理化、自己弁護、本人の失敗なのに他人や環境に責任をなすりつけること、となる。実にさまざまな要因が、安定化の過程に貢献したり、それを妨げたりするものである。

努力の過程は、前進一昇進の過程である。人はひとたび職業経歴の航路に船出すると、そこに落つくか、または昇進を求めるものである。この過程は、非公式な人間関係とか、本人の業績・業績とか、技術などによって大きく左右されるものである。

不満足のプロセスは、自己の仕事に対する自己評価の結果不満足に悩まされる過程で、いわばプラトンの状態に到達した時に起る心理的葛藤の時期である。場合によっては転職を考えたり、将来への希望を失って挫折しかねない状態である。いわば、壮年期から老年期への転期として世阿弥は第二の危機的転期と呼んでいる時期である。

6) 四十四、五

この比よりの能の手立、大方変るべし。たとひ、天下に許され、能に得法したりとも、それに附けても、よき脇の為手を持つべし。能は下らねども、力なく、やうやう年(開け)ゆけば、身の花も、外目の花も、失するなり。先づ、優れたらん美男は知らず、よきほどの人も、直面の申樂は、年寄りては見られぬものなり。さるほどに、この一方は欠けたり。

この比よりは、さのみに細かなる物まねをばすまじきなり。大方、似合ひたる風体を、安々と、骨を折らで、脇の為手に花を持たせて、あひしらひのやうに、少な少なとすべし。たとひ、脇の為手なからんに附けても、いよいよ、細かに身を砕く能をばすまじきなり。何としても、外目花なし。もし、この比まで失せざらん花こそ、誠の花にてはあるべけれ。

それは、五十近くまで失せざらん花を持ちたる為手ならば、四十以前に天下の名望を得つべし。たとひ、天下の許されを得たる為手なりとも、さやうの上手は、殊に我が身を知るべければ、なほなほ、脇の為手を嗜み、さのみに身を砕きて、難の見ゆべき能をばすまじきなり。かやうに我が身を知る、得たる人の心なるべし。

(岩波文庫版・世阿弥作、野上豊一郎・西尾実校訂 風姿花伝による)

この年頃からは能のやり方はあらかたかわるべきである。たとえ、能の奥儀を悟得しても、座中には優秀な幹部俳優を抱えておくべきこと、したがって、座中の若手を養成することの必要性を強調している。能の実力は下らないけれども、自分の身につけている生理的美と、見物の目にうつる美も、年が経つにしたがって下っていくことはどうしても避けられないことである。よほどの美男も仮面をつけないで、素顔のままで演ずる物まねは、年をとってくると見られないものになってきて、真面の申樂という一面は失われてしまうものである。

したがって、この時期からは、あまり手のこんだ物まねはしないようにして、自分に似合った風情の能を引受けて、座中の若手を仕立てて晴れの役をさせて、自分はおつき合いのようにひかえ目ひかえ目にして、技巧をこまかくして身を砕くような強く動く能はしない方がよろしい。

とにかく年をとってしまつては、見物の目には魅力がなくなってくるものである。殊に四十歳以前に天下の名人を許されたような悟道の人、なおさら、わが身を十分に知っているから難点の見えるような曲を演ずることはしないはずである。自分自身を知る心の持主こそ、能の真髓を会得した人である。と説いている。

すなわち、この時期は職業的発達の段階からすると、維持の段階に相当することになる。自

我概念の維持または自我概念による苦悶の時代である。大多数の創造的分野では、人間の新しい着想は、40～45歳ごろまでに出てくる。創造性のカーブは20歳代でいちじるしく上昇し、20歳の後期または30歳代で最高頂に達し、それからだんだんと下り気味になる。

適応と幸福という見地からみれば、維持の段階は結実の段階か、さもなければ欲求阻止の段階である。中年になれば、だれでも、新しい地位を得るため、もっと骨を折る道を選ぶか、それとも、すでに得た“ところ”を楽しむために大いにくつろぐ道を選ぶかしなければならない。名人の域に達しようとする者にとっては、当然に前者の道を選ばなければならない。

又、維持の段階は、結実または自己実現の段階となるといってもよいであろう。それは、なれた方法で仕事の進歩ができそうな段階、変化がおそいのでその発展におくれずに適応できる段階、挑戦の結果が必ず業績と満足に結びつく段階である。創造の満足、才能を発達させまたは探究する満足、他人の尊敬を得る満足など、さまざまの姿をとるであろう。

アレン (Hervey Allen) が「人が、ほんとうの生活をする時期は、30歳から60歳までの間だけである。若人は夢の奴隷であり、老人は後悔のしもべである。」と書いたとき、それはこの段階をいい表わしたのであろう。アレンは又、「中年期について過度に熱心であり、青年期については不当に悲観的だ。」といているが、維持の段階の業績には、確固とした現実性があるといえる。

維持の段階が自己実現であるにしる、欲求阻止であるにしる、時の経過とともに、職業社会的圧迫から次第に離れるようになりがちである。自己充足した人間は、人生に対する見通しができ、困難にあっても苦もなく切り抜けることができ、他人のペースに引きまわされるのではなく、自分のペースで進むことができる。欲求阻止の人間は、自己防衛の機制の結果として、社会の期待が減少する結果として、孤立するようになりがちである。これが維持の段階における心理的なプロセスである。

7) 五十有余

この比よりは、大方、せぬならでは、手立あるまじ。「麒麟も老いては、驚馬に劣る」と申す事あり。さりながら、誠に得たらん能者ならば、物数はみなみな失せて、善悪見所は少しとも、花は残るべし。

亡父にて候ひし者は、五十二と(申しし)五月(十九日)に死去せしが、その月の四日の日、駿河の国浅間の御前にて法楽仕り、その日の申楽、殊に花やかにて、見物の上下、一同に褒美せしなり。およそ、その比、物数をば早や初心に譲りて、やすき所を少々なと色へてせしかども、花はいや増しに見えしなり。これ、誠に得たりし花なるが故に、能は枝葉も老木になるまで、花は散らで残りしなり。これ、目のあたり、老骨に残りし花の証抛なり。

年末稽古以上

この時期に入ったら、大方は何もしないというやり方以外に適当な方法はないであろう。「麒麟も老いては、驚馬に劣る」という諺にもあるとおり、ほんとうに芸の奥儀を会得した能役者なら、いろいろの物真似わざ、演じられない曲はなくなってしまっても、又どんな場合でも、芸は残るのである。

亡父観阿弥は、五十二歳の五月十九日に死去したが、その月の四日に駿河の国の浅間神社に能を奉納したが、貴賤を問わず見物人一同はほめたたえたそうである。数々の曲を演ずることは、初心者(世阿弥)にゆずって、亡父は、らくらくしたところを、手数少な内にかえて

演じたが、美事な演技振りであった。ほんとうに体得した芸であったから、老木になって枝葉が少なくなっても、花は散らないで残っているのと同じように、老人となって皮や肉は衰えても、骨だけはしっかり残っているので、芸が枯淡になって残っていた結果である。

これはまさに下降の年代における芸道修業の在方を教えたものである。この時期は新しい自我への適応の時期である。

老令と下降は、身体的および精神的過程の鈍化と、忍耐力やエネルギー蓄積の減少とを、その特色としている。年をとりつつある人は、自分の能力のうちのいくつかは、もはや以前ほど強大でないという事実を、いく分自覚するのが普通である。すなわち、自分が下り坂にあることを確認する。過去においてうまく適応してきた人は、自分に関するこれらの新しい知覚を、自分の自我概念の中に統合し、過去の自分の姿に止まろうというむだな努力をやめて、これから後に予想される自分の姿を受け入れることができようである。

過去においてうまく適応しなかった人は、要求されるとおり、新しい経験を消化して、自我概念を修正するか、このような新しい自我知覚を受け入れにくいようである。したがって彼はこれらの自我知覚を抹殺したり抑圧したりするとか、合理化し去るとか、自分の能力の限界を他人のせいにするとか、あるいはさまざまなやり方で、それに対す補償に努めようとするのであろう。

自我概念の変化—権力・強さ・地位・権威、および他人からの要望が低下するにつれて、老人は自我概念を変容しなければならないことに気づくものである。個人の変化に応じて変化しなければならないのは、自我概念だけでない。自分の役割も変化しなければならない。身体的また精神的能力に合致するように、役割分担を変容することが自覚されてこなければならぬ。これが下降の年代における人間の在り方でなければならない。

4

以上は風姿花伝の第一年来稽古条について、職業的発達論の立場からの考察である。要するに、人間がこの人生に生きるということは、人間のおかれているその時代その社会において、その時代その社会がわれわれならびにわれわれの役割（職や仕事）に対して要求していることを、われわれの仕事を通して、日毎に実現することを意味することである。

生きるということは、これを客観的に眺めると、舞台面の動きすなわち、その時代の思潮だの、その時代の傾向だの、その時代の社会情勢だの、その時代の雰囲気だの、要するにその時代の文化の型 **Culture patterns** の中で育てられて、その型 **Patterns** に同化され、その型を身につけ…つまり、その時代その社会の大部分の人間に共通する社会的性格 **Social characters** というものを身につけ、その時代人としての歴史的な特徴をにないつつ生きることを意味することである。

又、生きるということは、つぎつぎに身近に展開してくる大小さまざまな事件を処理することであり、その点で成功したり失敗することであるということが出来る。

つまり、生きるということは、人間が生きている現実の社会への適応すること **Social adjustment** でもあれば、自分を生かすこと、自分を主張すること、自分の個性を発揮すること、すなわち、自己を実現すること **Self realization** でもある。

社会に適応すること——それは、社会の要求しているものを、半ば無意識的に実現することでもあれば、流行を追って周囲の人と同調することでもあれば、その社会の伝統的な慣習やモラル

に従って行動することでもあれば、その時代に生きるもの皆の持っている共通の性格 *Social characters* を身につけること、現実をしっかりと理解し把握するために、さまざの学問をやったり、歴史を研究したりすることでもある。又、自己の所属集団の要求を実現したり、その集団の習慣・思想・性格に同調すること、周囲の人に対して愛情や友情を抱くことでもある。このように生きることに対する英知を、風姿花伝の年来稽古の条々の中から汲みとることができるようで、まことに現実で生きている尊い誠しめであると思う。

第二は人間形成の問題である。人間形成ということは単に少年や青年だけの問題ではない。壮年も老年も、男も女も、都会人も農山村の人も、人間というものはみな形成されつづけられなければならない。形成は人間が負っている課題である。だれひとり、すでに形成されたもの成熟した人間はいない。人間はみなこの形成の課題を負っており、いつも自己形成を遂行中なのである。だが人間は、パスカルやキルケゴールの言ったように、偉大と悲惨、自由とれい属、高適さと卑しきの不思議な統一で、実に不可解な、矛盾にみちた、いわばひとつの謎なのである。そこで、この形成の課題が有効に果されるためには、人間形成の模範や基準や原型が必要である。風姿花伝の年来稽古の条々は、まことによく、人間形成の模範や規準や原型を示したものといてよく、今日の時代においてもよくよく味うべき“ことば”を残している。

香西精氏は「世阿弥時代の能と今日の能」という論文の中で、つぎのように述べている。「世阿弥時代の能は、生き生きとした創造の芸術であった。新作が相競い、相ついで上演されていた。まさしく能の大成期であった。室町政権の樹立を軸にしての社会的大変革を背に、芸壇は、鎌倉末以来王座を始めていた田楽諸座をはじめ、丹波・摂津・山城・大和・近江など諸国の猿楽諸座がひしめきあって、新秩序の社会に主導的地位を得ようと必死にせりあう“シュトルム・ウント・ドラング”の時代であった。その競争のはげしさは“勝負の立合い”と呼ばれる諸座のコンクールに端的に示されていた……」。このことばの中からも、世阿弥の芸道に対するきびしい誠しめや、芸道への精進のあり方を知ることができる。

第三に、風姿花伝の年来稽古条々の中から、世阿弥の人間性をくみとることができる。世阿弥の人間性は、強靱な独創的個性の持主であること。人間の先天的素質を重んじ、その意義を深く掘りさげ、的確に位置つけることのできる芸術家であるということであろう。すぐれた先天的性も、それを発揮するためには、後天的な稽古の「絶大な課題を見出し」、稽古の方法をきわめつくして、「日常の全生活をあげて、能の稽古たらしめるという境地」に到達しようと志して、ついにその境地に到達した人である。つまり、自己の全生活を貫く修道精神に中世芸術の人間性を確立した人といえよう。

参 考 文 献

- 1) 岩波文庫、版世阿弥作、野上豊一郎・西尾実校訂、風姿花伝、昭37. 8。
- 2) 久松潜一、西尾実校注・歌論集能楽論集（日本古典文学大系）昭36. 9 岩波書店。
- 3) 文学（世阿弥特集号）vol. 31, No. 1, 1963 岩波書店。
- 4) 西尾実著、中世的なものとその展開 昭36. 12 岩波書店。
- 5) 永積安書著、中世文学の成立 昭38. 6 岩波書店。
- 6) D. E. Super *The Psychology of Careers* 1957 Harper & Brothers.
- 7) スーパー著、日本職業指導協会訳、職業生活の心理学 昭35. 12 誠信書房。
- 8) 職業的発達理論の研究—職業指導研究セミナー報告書— 昭37. 3 日本職業指導協会。